

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

中世史の光にてらしたヨ-ロッパ統合〔含 英文〕

著者	Schulze Hans K., 小倉 欣一
著者別名	Ogura Kinichi
雑誌名	経済論集
巻	20
号	1
ページ	p173-185
発行年	1995-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005439/

中世史の光にてらしたヨーロッパ統合

—— ハンス・クルト・シュルツェ ——

小 倉 欣 一 訳

1. 古代の起源

ヨーロッパは、大陸ではなく、一つの神話である。古代ギリシアの最高神ゼウスは、王女のエウロペに恋し、雄牛に姿を変え、彼女をクレタ島へと誘惑した。ギリシア人の考えにもとづき、この島が属する大陸は、王女に敬意を表して「ヨーロッパ」と呼ばれた。クレタ島は、「ヨーロッパの揺籃の地」である。

ギリシア人は、アジア、ヨーロッパ、アフリカの三つの大陸を区別した。古代では、地中海と黒海から北の全ての地域がヨーロッパに含まれた。ボスポラス海峡とドン川とがヨーロッパとアジアを分かち、ジブラルタル海峡がヨーロッパとアフリカとを隔てた。ギリシア人の世界は、地中海とその沿岸で、ヨーロッパの内陸ではなかった。ギリシア人の政治的、文化的遺産を受け継いだローマ人は、はじめて地中海全域を支配下においたのみならず、ヨーロッパ大陸の大部分をも征服した。それにもかかわらず、ローマ帝国は地中海国家であった。帝国内部にローマ文化が広まった。とりわけ、行政や軍事組織、商業や手工業、都市生活、芸術、技能および学問の分野で顕著であった。ラテン語は、支配的な言語となった。コンスタンティヌス大帝(在位306-337年)の下で、キリスト教は国家宗教となった。教会は間もなく、精神的、政治的、経済的、文化的生活の重要な要素となった。

古代末期に、東西の分離というヨーロッパ史にとり大きな意味をもつ過程が始まった。ローマ帝国の重心は、東方に移動した。コンスタンティヌス大帝は、ギリシア都市ビザンツ(コンスタンティノーブル、今日のイスタンブール)を新たな首都とした。ローマは、優位を失った。4世紀にローマ帝国は、西ローマ帝国と東ローマ・ビザンツ帝国に分かれ、亀裂を深めた。西ローマ帝国は、5世紀

に民族大移動の嵐の中で滅亡し、東ローマ帝国は、生き延び、ギリシア的オリエン的な形で古代の多くの遺産を中世へと救い出した。

ローマ帝国の境界が、ヨーロッパを分割した。境界は、ライン下流地域に発し、ボンの辺りで南東に折れ、国境防衛の土塁（「リームス」と呼ばれた）となって、レーゲンスブルクでドナウ川に達した。そしてドナウ川を下り、黒海に注いだ。この様に、ローマ人の領域と「野蛮人」の領域に分かれたことは、ヨーロッパの以後の運命に大きな帰結をもたらした。第1に、ローマ属州の住民は「ローマ化」し、後にローマ系〔ラテン系〕諸民族の民族的基層をなした。ラテン語は、ローマ系〔ラテン系〕諸言語の基礎となった。第2に、ヨーロッパの発展により、かつてローマ帝国に属し、古代文化が帝国の崩壊後も遺産として存続した領域で、新たな諸民族共同体の形成が始まった。

2. ヨーロッパの民族的構成

ヨーロッパと地中海の地図は、民族大移動とローマ帝国の没落により根本的に変化した。中央および西ヨーロッパの大部分は、ゲルマン諸部族の支配下に入った。イベリア半島では西ゴート族とスエービ族、ガリア地方では西ゴート族、フランク族、ブルグント族、イタリア半島では最初に東ゴート族、その後568年以来ランゴバルト族が支配した。ヴァンダル族は、北アフリカにまで進出した。ローマ帝国の領域に建設された、これらのゲルマン諸国家における民族的構成の特徴は、ゲルマン人が数の上ではるかに多いローマ系住民を支配した事実にあった。

ライン川の東にはアレマン族、バイエルン族、東フランク族、テューリングン族、ザクセン族、北海沿岸にはフリーセン族といったゲルマン部族が定住した。デンマーク、ノルウェー、スウェーデンにも、ゲルマン人が移住した。アンゲル族とザクセン族は、5世紀に、ケルト人の住むブリタニア島の征服を始めた。ケルト人は、今日でもアイルランドと〔フランスの〕ブルターニュ地方に住んでいる。

東ヨーロッパには、スラブ諸部族が居住した。かれらは、中世初期にエルベ川とザーレ川にまで進出し、ボヘミアとモラヴィア地方、東アルプス地方、バルカン半島の大部分に移住した。しばしばかれらは、南東地域でアジア系の好戦的遊牧民族に支配された。バルト海地域には、プロイセン族、クール族、リヴォニア族、ラトヴィア族、リトアニア族などのバルト海諸民族が住んだ。その隣人であるエストニア族とフィンランド族は、マジャール族（今日のハンガリー人）と共に、フィン・ウゴル語族に属している。

3. フランク族によるヨーロッパの基礎づけ

6世紀には、西および中央ヨーロッパがゲルマン化されたようにみえた。しかし、ゲルマン人の諸国家のなかで最後まで残ったのは、フランク王国だけであった。メロヴィング家出身の国王が、フランク族、ローマ系住民、ブルグント族、アレマン族、バイエルン族、テューリンゲン族を支配した。だが、この「多民族国家」は、「諸民族の牢獄」ではなかった。なぜならば、さまざまな民族集団が自分たちの言語を話し、自身の法と慣習を維持したからである。王国の制度のみが、フランク族とローマ帝国後期の基盤に依拠した。政治的指導層においても、ローマ帝国後期の貴族階級とゲルマン諸部族の貴族集団に属する者が増した。

フランク王国において、ローマ的要素とゲルマン的要素とが総合し、「ヨーロッパの誕生」としてきわめて重要な意味をもった。フランク族は、ローマの行政組織の遺産を引継いだ。ラテン語は教会の言語として残ったが、さらに行政、法、学術の用語としても役立った。ガリア南部および西部のローマ都市では、商業取引、手工業、貨幣流通がまだみられた。フランク国王は、また貨幣をローマの模範に従って造らせた。もっともメロヴィング朝においても、経済的、文化的な衰退は続いた。

重要な出来事は、500年頃にフランク族がキリスト教を受容したことである。アリウス派教徒であった他のゲルマン部族と違って、フランク族はカトリック教徒に改宗した。それゆえに、フランク王国では、ローマ系住民とゲルマン人の間に宗派的な対立はなかった。教会は、民族大移動期の破壊から立ち直り、数世紀にわたり教育、芸術、文化の最も大切な担い手となった。

中央ヨーロッパでフランク王国の基礎が固まる間に、地中海地域では根本的な変化が生じた。予言者マホメットが新たな宗教であるイスラム教を告知し、その信徒アラビア人は、シリア、アルメニア、メソポタミア、イラン、エジプト、北アフリカを征服した。かれらは、711年に西ゴート王国を滅ぼし、イベリア半島のコルドバに後ウマイア朝を建てた。東ローマ帝国は、守勢に転じた。間もなくギリシアの他に、小アジアの西部、バルカン半島の一部、南イタリア、地中海のクレタ、シシリア、サルディニアの諸島のみが、東ローマの支配下に残るにすぎなくなった。

地中海世界の統一は、アラビア人の膨張によって破壊された。地中海は、また経済的優位をも失った。ヨーロッパには新たな経済圏が生まれ、その中心はフランク王国と北海・バルト海沿岸地域に置かれた。ベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌは、それゆえ、イスラム教徒の進出を古代と中世の決定的な切れ目とみなした。ヨーロッパは、力を内部に集中して独自の政治的、文化的、宗教的な姿をとり、ビザンティウム〔ビザンツ〕やイスラムの文化圏とはっきり区別された。

4. 「ヨーロッパの父」カール大帝

フランク王国は、8、9世紀に新たなカロリング朝の下で最盛期に達した。アングロサクソン人の宣教師たちが、キリスト教の布教と堅固な教会組織の構築を果たした。なかでもボニファティウスは、最も成果を挙げ、フランク教会と教皇庁とを結びつけた。それによって教皇たちとフランク諸王は、間もなく政治的に協力し合った。この「玉座と祭壇の同盟」は、ヨーロッパ史の特徴の一つとなった。

カール大帝(在位768-814年)は、君主制を強化し、フランク王国を拡大した。ザクセン地方とフリースラントは服従させられ、イタリアのランゴバルト王国は征服され、ドナウ川沿岸のアヴァール王国は壊滅させられた。今日のフランス、ネーデルラント、ベルギー、ルクセンブルク、スイス、オーストリア、エルベ川とザレ川までのドイツ、北および中央イタリアは、カール大帝の王国に属した。勢力ある貴族、いわゆる「王国貴族層」が、高級聖職者とともに政治的指導層を形成した。カール大帝は、王国の行政組織を再編し、司法を改善することに努めた。経済の活性化には、通貨改革が役立った。王国全体に通用する、国王が保証する銀本位制が導入されたのである。この改革は、数世紀にわたり、ヨーロッパ通貨制度の基礎となった。

カール大帝と後継者のもとで、フランク王国は文化的盛期をも迎えた。カール大帝の「教育改革」によって、聖職者の養成は改良され、典札は改められ、ラテン語は奨励され、読み易い「カロリング式小文字」が造られた。カール大帝の宮廷では、意識して古代の文学、芸術、学問の遺産を振興したので、この精神的運動は「カロリング・ルネッサンス」と名づけられた。フランク「王国文化」と呼んでもさしつかえない。もちろん、「東西の文化格差」は常に存在した。なぜならば、西部はローマの遺産にもとづき、東部のゲルマン人定住地域よりも、高い文化水準になっていたからである。

カール大帝の時代にヨーロッパは、はじめて純粋に地理的概念から政治的概念になった。統治者の宮廷でヨーロッパは、その支配に服する諸国と同一視された。それゆえに、一人の宮廷詩人は、カール大帝に「ヨーロッパの父」という名誉ある称号を献じた。

5. 教皇と皇帝

カール大帝の戴冠式は、800年にローマで教皇により挙行された。これは、ヨーロッパ史にとってきわめて重要な出来事であった。西方世界は独自の皇帝を戴き、皇帝はローマ帝国とキリスト教の伝統を統一し、ローマと教皇庁に密接に結びついた。ビザンツ皇帝は、このような行為を承認しなかった。西方世界(「アーベントラント [夕方の方]」)と東方世界(「モルゲンラント [朝の方]」)への分裂

は、さらに深まった。ローマ帝国のかつての首都ローマは、皇帝の戴冠地と西方世界の宗教的中心地となった。教皇が西方世界の教会の首位に立ちえたからである。西方世界のローマ・カトリック教会とコンスタンティノープルの総主教に導かれる東方世界のギリシア正教教会の亀裂は、ますます深まり、1504年に最終的な分裂にいたった。

いまや西方世界には、俗界と聖界の首長である皇帝と教皇がおり、協調してキリスト教世界を統治することとなった。皇帝と教皇が頂点に立つ、神の創造した世俗秩序の理念は、数世紀経つうちに西および中央ヨーロッパの諸民族に共属感情を抱かせるのに明らかに寄与した。

6. ヨーロッパの覇権勢力としてのドイツ帝国

皇帝理念は、西方世界の自己意識の確立にとって疑いなく大変重要であった。しかしこの理念は、カール大帝の王国の統一性を永続させるにはまだ政治的に十分ではなかった。9世紀中頃にフランク王国は、西フランク王国、東フランク王国、イタリア王国、ブルグント王国に分かれた。

10世紀に東フランク王国からドイツ帝国〔神聖ローマ帝国〕が誕生し、西方世界で最も勢力ある国家となった。オットー大帝(在位936-973年)は、イタリア王国を征服し、支配権をさらに東方に拡大した。当時異教徒のハンガリー人が全ヨーロッパを恐怖と不安に陥れていたが、大帝はこれと戦って勝利を納め、キリスト教西方世界の救助者とみなされた。962年ローマで教皇による皇帝戴冠式が挙行されたとき、西方の帝国は輝かしく再生した。

ドイツはイタリアと結びつき、ヨーロッパの心臓部には一つの勢力圏が出現した。そこには、カール大帝の有名な王宮があるアーヘンと使徒ペテロとパウロおよび教皇の都市ローマが含まれた。皇帝コンラート2世(在位1024-1039年)の統治下に、ブルグント王国も加わった。皇帝たちは大権を駆使したが、キリスト教的普遍帝国の理念を実現し、全西ヨーロッパを征服し、その支配に服従させようとは企てなかった。

皇帝が使命としたことには、教会を保護し、キリスト教を広めることも含まれていた。オットー朝、ザリエル朝の強力な皇帝は、教皇権がローマの貴族門閥の抗争の中で没落するのを阻止した。帝国からハンガリーと近隣のスラヴ諸民族がキリスト教化され、西方の諸民族共同体に統合された。ローマ・カトリック教会は、しかし、東方でビザンツから始められた伝道活動にぶつかった。この伝道活動は、セルビア人、ブルガリア人、ロシア人をギリシア正教徒とすることに成功していた。

皇帝と教皇が「キリスト教帝国」を協調して統治することが期待されたが、それは満たされなかった。11世紀後半に権力闘争が始まり、2世紀後に教皇の勝利に終わった。13世紀中頃にシュタウフェン朝が断絶すると、帝国はヨーロッパにおける主導権を失った。皇帝の地位は、なお数世紀間ドイツ国王に留保されたが、普遍的な帝国理念は力を失った。それは、「民族化」された。すなわ

ち、帝国はもっぱらドイツ人の帝国となり、「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」と呼ばれた。

7. 諸民族からなるヨーロッパ

ヨーロッパの諸民族は、古代末期の諸民族の混合期と民族大移動の時期から次第に発展した。9、10世紀にフランク王国の土壌にドイツ、フランス、イタリアの諸民族が成長し、イベリア半島ではレコンキスタ[領土奪還]、つまりアラビア人追放闘争の過程でスペインとポルトガルの民族が生まれた。東ヨーロッパでは、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ロシア、ブルガリア、ルーマニア、スロヴェニア、セルビア、クロアチアで、北ヨーロッパでは、イングランド、アイルランド、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンで民族が形成された。中央ヨーロッパの東部での民族構成には、ドイツ人の東方植民が大きな意義をもった。西スラヴ人の居住地域の大部分は、ドイツ人の移住によって次第にドイツ地域に変わった。ポーランド、ボヘミア、ハンガリー、バルト海沿岸地域において、ドイツ人は少数民族ではあるが、これらの地域の歴史にとって重要な存在となった。

民族形成の推移とその推進力は、なかなか究明し難い。政治史が大きな役割を演じたが、国家形成と民族形成は常に一致したわけでない。ヨーロッパの大帝国は、いずれも民族国家ではなかった。しかしながら、中世中期にすでに民族感情の萌芽が認められる。皇帝は覇権的地位を求めたが、それは個々の国家のもつ主権の原理によって疑問視された。

しかし同時に、ヨーロッパ諸民族の共属感情もみられた。この共同体意識は、エルサレムと聖地の解放に役立つとした十字軍の時期に、たしかに一定の役割を果たした。その後トルコ人がヨーロッパに進出したが、キリスト教的西方世界は、初めは本気になって反抗しなかった。だが、1453年にコンスタンティノープルが陥落し、ようやく政治的、宗教的な根柢をもつヨーロッパ理念が喚起された。それは、キリスト教的ヨーロッパをイスラム教徒から護るという義務の理念であった。

8. 中世ヨーロッパでヨーロッパ的なものは何か?

この問いに対する私の答えは、最初の一つの試みにすぎない。それは、若干の点に限らざるをえない。中世ヨーロッパでヨーロッパ的なものは、まず第1に古代ギリシアとローマの遺産、第2にキリスト教の布教、第3に諸民族の形成であった。これは、主要な標識である。しかしながら、法と国制、経済と社会、学問と芸術にも、ヨーロッパのみに存在し、あるいはヨーロッパに特有な多くの現象がみられた。すなわち、君主制、貴族支配、ヨーロッパに典型的なレーエン制度[騎士の主従関係]、そして独自の社会構造を挙げることができる。この社会構造は、諸身分の階層制をとも

中世史の光にてらしたヨーロッパ統合

なうが、高い社会的流動性もみられ、聖職者と俗人とが明確に区別された。さらに経済、定住、法国制の特徴的な形態が現れた。例えば、都市と農村の共同体が仲間団体として組織され、都市と農村が鋭く分離し、多くの都市が強い政治的地位を獲得し、中世後期には貨幣と財政制度が急速に発展した。

教会が宗教、政治、経済、文化の領域で大きな役割を演じたのも、中世ヨーロッパの特徴であった。教皇制、教会国家、帝国教会組織、聖界諸侯領、修道会と修道院、騎士修道会、聖職者独身制、十字軍、清貧運動、公会議主義、異端運動、異端審問、反ユダヤ主義が、検索語として挙げられる。教育と学校も、最初は教会が支配した。中世の中期と後期に、ようやく都市の学校と大学が加わった。ラテン語は、神学、哲学、文芸、学術の言語であり、近世初期にいたるまで学者の言葉としてその地位を主張した。

ヨーロッパの芸術にとって特徴的なのは、様々な様式——カロリング、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンスの芸術——が継起したことである。西洋の芸術の傾向は、地域的な差異を伴っていた。ヨーロッパの大部分は、また同じ大きな精神的潮流——スコラ主義、神秘主義、人文主義——にも棹さしていた。

ヨーロッパの文化史、精神史にとって特徴的なのは、ルネッサンスという現象である。それは、ギリシア人とローマ人の哲学、芸術、学問の遺産に意識して立戻ることであった。カロリング朝ルネッサンスと15、16世紀ルネッサンスとの間には、さらにオットー朝ルネッサンスと12世紀ルネッサンスが存在した。

9. 中世の遺産とヨーロッパ統合

著名なフランスの歴史家ジャック・ル・ゴフは、近著『古きヨーロッパと近代の世界』のなかでこう書いている。「ヨーロッパは、古いのではなく、伝統に満ちている。」ヨーロッパの統合が成功するならば、われわれヨーロッパ人は、その伝統の力を考えに入れねばならない。伝統の促進的、あるいは阻止的作用を分析することは、この講演の枠内では不可能である。それゆえ、私は若干の点を指摘するに留めたい。

1. ドイツの歴史家ヘルマン・ハインペルは、かつて「民族とヨーロッパとは、対立するのではなく、相互に置換しうる概念である。諸民族が存在することが、歴史的にみてヨーロッパのヨーロッパ的などころである。」と述べた。私は、この見解にまったく完全に同意する。私はまた、諸民族の存在をフランス革命以後にようやく語りうるのではなく、諸民族、そして民族諸国家についてさえ、その成立の過程はすでに中世に始まり、今日なお存続している、と考えている。民族と民族意識は、歴史的に成長した現象であり、ヨーロッパ統合の過程においてそれを考慮しなければなら

い。ヨーロッパは、歴史家の目からみるならば、諸民族のヨーロッパでのみありうる。

2. どの諸地域が本来ヨーロッパに属するのか? 中世においても、ボスポラス海峡、黒海、ドン川がヨーロッパの東の境界とみなされた。近世初頭にヨーロッパは、女王の姿で描かれている。スペインが頭、ボヘミアが心臓である。しかしこの描き方からは、ヨーロッパがローマ・カトリック教の西部とギリシア正教の東部に分かれていることを識別できない。この分離は、中世の遺産として近代ヨーロッパに引き継がれているのである。

3. 中世において、ヨーロッパの中心部は形成された。スイスの文化哲学者ライノルトは、この地域を実に適切に「ヨーロッパ的ヨーロッパ」と名づけた。そこにはまずなによりも、カール大帝の支配下に入った諸地域が属した。ヨーロッパ統合がまさにこの地域に始まったのは、けっして偶然ではない。それゆえに、ヨーロッパ連合は、大ざっぱいえばローマ [ラテン] 系およびゲルマン系諸民族の共同体でもある。

4. 「ヨーロッパ的ヨーロッパ」は、すでに中世において西スラヴおよびバルト諸民族とハンガリ一人を西方の文化圏に組み込んだ。これらの諸民族は、西方からキリスト教、進んだ経済、技術、法と国制、芸術と文化の多くの要素を取り入れた。それは、まさしくペレストロイカの後に主権を獲得し、今日ヨーロッパ連合に加入しようとしている諸民族なのである。歴史は、確かにかれらにその正当性を認めている。

5. もちろん、いくつかの問題がある。東方の諸民族は、西方の文化をドイツ人を介して受容した。その際、中世のドイツ「東方植民」が、大きな役割を演じ、中央ヨーロッパ東部に一種の「多文化社会」を出現させた。1945年以後ドイツ人がこの地から追放され、状況は変化したが、固定しなかった。とりわけポーランドとチェコ共和国では、多くの人々がヨーロッパ連合の東方への拡大を不信の目でみているともいえよう。再統一したドイツが、この過程で指導的な役割を演ずると思われるからである。

6. これまでヨーロッパ思考を一時的に覚醒させたのは、いつも外敵の脅威であった。ヨーロッパ統合の精神的基礎となりうる理念は、そもそも存在するのだろうか? ヨーロッパ統合の最初の数年には、「カールの王国イデオロギー」が重要な役割を果たしたが、その後の運動はカール大帝の王国 [の範囲] を越えて進展した。西方世界という理念もまた、全ヨーロッパの統合となると十分ではない。キリスト教は、もちろん世界宗教と理解されている。だが、ヨーロッパはまだ、限定付でのみキリスト教大陸なのである。統合したヨーロッパが政治家の、官僚の、銀行の、財閥のヨーロッパ以上のものとなるべきものならば、ヨーロッパ人は、その文化や、共通の、しばしばぞっとするような歴史や、人間的で民主的な社会の理想について深く考えをめぐらさねばならない。

主要な文献

- Barraclough, Geoffrey; *European Unity in Thought and Action*, Oxford 1963.
- Dawson, Christopher; *Die Gestaltung des Abendlandes. Eine Einführung in die Geschichte der abendländischen Einheit*, 2. Auflage Köln 1950.
- Fischer, Jürgen; *Oriens - Occidens - Europa. Begriff und Gedanke "Europa" in der späten Antike und im frühen Mittelalter* (Veröffentlichungen des Instituts für europäische Geschichte Mainz, Band 15), Wiesbaden 1957.
- Halecki, Oskar; *The Limits and Divisions of European History*, London-New York 1950. Deutsche Ausgabe unter dem Titel; *Europa. Grenzen und Gliederung seiner Geschichte*, Darmstadt 1957.
- Hay, Denis; *Europe. The Emergence of an Idea* (Edinburgh University Publications. History, Philosophy and Economics, No.7), Second Edition Edinburgh 1967.
- Holzmann, Walther; *Das mittelalterliche Imperium und die werdenden Nationen*, Köln und Opladen 1953.
- Le Goff, Jacques; *Das alte Europa und die Welt der Moderne*, München 1994.
- Sattler, Rolf-Joachim; *Europa. Geschichte und Aktualität des Begriffes*, Braunschweig 1971.
- Schulze, Hagen; *Staat und Nation in der europäischen Geschichte*, München 1994.

訳者の付記

本稿は、1994年度東洋大学交換研究員として来日したドイツ連邦共和国マールブルク大学のハンス・クルト・シュルツェ教授(Prof.Dr.Hans K. Schulze)が、1994年10月4日-5日に東洋大学浦水会館にて開催されたマールブルク大学・東洋大学学術シンポジウム「歴史的転換期にあるヨーロッパ——EU統合を中心として——」の二日目にドイツ語でおこなった特別講演 *Die Einheit Europas im Licht der mittelalterlichen Geschichte* を訳出したものであり、末尾にその英文レジュメを掲げる。この講演は、同志社大学、竜谷大学、早稲田大学でもおこなわれた。関係各位の御厚意に謝意を表する。

The European Unification in the Light of Mediaeval History

Hans K. Schulze

Summary

1 . The Ancient Roots

A short look on a map of the world shows us that Europe is not a continent by itself, but only the western peninsula of the Asiatic continent. The history of Europe begins with the well-known myth of the Greek god Jovis and the beautiful Lybian princess Europa. Therefore we might say that Europe is more a myth than a continent. Be that as it may, in reality the Greek and Roman Antiquity is doubtless the fundamental basis of European civilization, although the history of the ancient world was above all the history of the countries around the Mediterranean Sea. It was very important for the development of Europe that some parts of Western and Middle Europe belonged to the Roman Empire and were strongly influenced not only by Roman language and civilization but also by Christianity. The border of the Roman Empire, which divided Europe, was also a frontier of civilization.

2 . Ethnical Structure of Early Mediaeval Europe

The political and ethnographical map of Europe was fundamentally changed by the migration of the German tribes ("Germanische Völkerwanderung") and the setting of Slaves in Eastern and Southeastern Europe. The great Roman Empire was divided in its western and eastern part. The Eastern Roman or Byzantine Empire with Constantinople as its capital survived this dangerous period, but the Western Roman Empire was destroyed by the Germans. On its ground some great Germanic kingdoms grew up, where the Germans ruled over the Romans, which formed the majority of the population.

Other German tribes inhabited the western part of Germany, Danmark, Norway and Sweden and began to conquer Britain. The Slaves took possession of the greatest part of Eastern and

Southeastern Europe. Other ethnical groups were the Basks, Celts, Avars, Bulgarians, Hungarians and the Baltic peoples. The most important nation of the Byzantine Empire were the Greeks.

3 . The Foundation of Europe by the Franks

In the Frankish Kingdom the synthesis of Roman and German civilization and Christianity began. The Franks became christians and took possession of the Roman heritage in many fields of human life, for example in economy, administration, culture and society. The synthesis was very important for the making of Europe as a cultural unity in the Middle Ages.

Other important events were the Arabian conquest and the spreading of the Islam, which destroyed the unity of the Mediterranean world. Then there were great powers, the Byzantine Empire, the Arabian Caliphate and the Frankish Kingdom.

4 . Charles the Great- “Father of Europe”

Under the reign of the Carolingian dynasty the Frankish monarchy reached the highest point of its power. Charles the Great (768-814) extended the Frankish kingdom, forced the power of monarchy against the nobility and promoted the development of economic life. His reign included the greatest part of Western and Middle Europe.

In the Carolingian century the idea of Europe as a political and cultural unity emerged. But Europe was identified only with these countries which belonged to the Empire of Charles the Great. Therefore a Frankish poet called him the > Father of Europe <.

5 . Papacy and Imperial Monarchy

In 800 Charles the Great got the title of an Emperor. He was crowned by the pope in Rome. This revival of the Western Roman Empire was a very important event in European history, because the western part of Europe, the so-called “Abendland” or Occident, got its own emperor. The pope became the spiritual and the emperor the secular head of Western Christianity and they should rule in harmony the Christian peoples. The division of Europe in the Roman Catholic Occident and the Greek Orthodox Orient got deeper and deeper.

6 . The German Empire as the Supreme Power of the West.

In the middle of the ninth century the Carolingian empire was divided in the four kingdoms, France, Germany, Italy and Burgundy. In the course of the tenth century the German kingdom became the dominant power in occidental Europe. Otto the Great (936-973) reigned over Germany and Italy and was crowned emperor in 962. Also his imperial monarchy followed the ideological traditions of the ancient Roman and the Carolingian empire. Since the eleventh century this empire included three kingdoms, Germany, Italy and Burgundy.

It was for some centuries the most powerful centre of continental Europe, and above all it was the starting point for the spreading of Western European civilization and Catholic Christianity under the Slavonian and Baltic tribes in Eastern Europe. By the help of the Germans these people were integrated into the mediaeval community of the European nations.

The Russians, Bulgarians and Serbians however gotten their Christian believe from the Byzantine Empire and were more or less included into the sphere of Greek influences.

7 . Europe, a Continent of Nations

The Development of the European nations began in the ninth and tenth century. It got a new quality by the first sings of national feelings in the twelfth century. The idea of the universal reign of the emperor had no future against the new principle of the independence of nations. Nevertheless there were some periods when a kind of European identification arose, above all in the time of the crusades and after the conquest of the Byzantine capital Constantinople by the Turks in 1453.

8 . What is European in Europe?

We can say that the combination of Roman and German elements with the Christian religion is one of the chief characteristics of Mediaeval Europe. An other one ist the important roll of the nations in European history.

Some other special characteritics developed in the course of time and can be found in the fields of economy, constitution, law, culture and society, such as the typical European form

of monarchy, nobility, knighthood, feudalism, township and rural community, furthermore the great influence of the church on all fields of Mediaeval life, Latin as the common language of education and science, the development of the university, the important spiritual movements like Scholastik, Mystic, Humanism and Renaissance and even the Romanic and Gothic art.

9. The Mediaeval Heritage and the European Unity

There is no doubt about it, that in the modern process of European unification some Medieval traditions are more or less important. But the problem is, that it is very difficult to judge their real influence.

1. The existence of the nations is doubtless the most important part of Mediaeval heritage.
2. The division of Europe in the Western and the Eastern sphere belongs to the Mediaeval heritage too.
3. The Carolingian empire had become the centre of the “Abendland” in the Middle Ages. In this most European part of Europe (“Europe Europeenne”) the idea of the unity of Europe was born after the second World War.
4. In the Middle Ages Germany became an important country in the middle of the continent. It played an important roll in the process of the integraton of the Slavonic Baltic peoples, but the “German East-colonization” also caused the permanent fear of the “German urge to the East”.
5. European unification needs not only an economic and political program, but also a mental one. The “Ideology of the Carolingian Empire” and the “Idea of the Christian Abendland” are of mediaeval origin, but I do not believe that they are really helpful for modern European unification.